

源氏物語事典

池田亀鑑編

源氏の読解に必要な基礎知識を整理・集成した大著！本書は源氏本文中の重要項目を注釈・解説し、その他に注釈書解題・諸本解題・所引詩歌伝典・作中人物解説・人物呼称一覧・年表・図録などを収録した基本図書。待望の復刊！B5判 一一八八頁 定価二六二五〇円

(価格は税込)

源氏物語注釈書・享受史事典

伊井春樹編 平安末期から幕末までの注釈書五二五点の詳細な解題と享受の歴史を年月日順に克明に追う。編者四十年に及ぶ資料収集の集大成定価一八九〇〇円

浮世絵大事典

特価期限迫る！

国際浮世絵学会編 絵師や作品・画題だけでなく幅広く最新の研究成果を盛り込み一冊に簡便にまとめた。特価二六二五〇円(10月末日まで) 定価二九四〇〇円

動詞・形容詞・副詞の事典

森田良行著 三つの品詞について、語種・分類・文型・用法・特徴・類義語など語例や一覽表を掲載して具体的な例文も示しながら詳細に解説。定価二九八〇円

老いの愉楽——「老人文学」の魅力——

尾形明子・長谷川啓編 「老い」をテーマにしてさまざまな角度から描かれた作品と作家を読み解く。「老い」の文学を愉しむガイドブックとして最適。定価二七三〇円

東京堂出版

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-17
電話 03-3233-3741 FAX 03-3233-3746
http://www.tokyodoshuppan.com

「JapanKnowledge J Kセレクトシリーズ」
日本研究に必須の近代雑誌をWebで自在に操る

Web版 日本近代文学館
編集・刊行 日本近代文学館

陽 明治28年～昭和3年

博文館発行・全31冊・17万5千頁 二五二万円
文芸倶楽部 明治篇 明治28年～明治45年
博文館発行・全28冊・10万8千頁 一八九万円

校友会雑誌 明治23年～昭和19年 八九三、五〇〇円
第一高等学校校友会発行・全380冊・3万8千頁

CD・DVD版で好評を博した3タイトルをWEBで提供。32万頁の膨大な本文画像に6万5千件の検索書誌データを付し3タイトルの串刺し検索を実現。

10月末刊行 『義太夫年表 近世篇』(小社刊)の大改訂を可能にする新見解を掲載した論文集

浄瑠璃本史研究

近松・義太夫から昭和の文楽まで——
神津武男著 A5判・75頁予定・定価一八九〇〇円

全国に所在する義太夫節正本約2万点を渉獵・調査し新聞報道された『曾根崎心中』初刷本の図版全丁を収録する他、浄瑠璃本の分類、興行と板元・正本刊行日の関係や、作品の歴史の変遷を解明。さらに全国2万点の正本の所在や外題の読み方などの詳細な一覽表を収録。明快・平易な論述スタイルで、誰にも読み易い研究書。

八木書店 出版部

【呈詳細内容見本】 *定価は本体+税5%の総額表示です。
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-8 K係迄
03-3291-2961 (FAX-6300) http://www.books-yagi.co.jp

国文学 11

国文学 解釈と教材の研究

平成二十年十一月十日発行 毎月一回十日発行 第五十三巻第十六号十一月号
昭和三十一年九月二十五日 第三種郵便物認可 (週刊七十六号)

特集 「萌え」の正体

定価一六〇〇円 本体一五二四円

第五十三巻第十六号 二〇〇八年十一月号

特集 「萌え」の正体

◆「萌え」の本質とその生成について 斎藤環

◆「萌え」と「萌えフォビア」 伊藤剛

◆音楽萌え／キャラ萌え／ジェンダー論

◆女性の萌え／萌えデザイン／法律

◆「萌えIIをかし」論ほか

国文学 11

日本語・日本文学・日本文化

二〇〇八年 第五十三巻第十六号

解釈と教材の研究



學燈社

ISSN 0452-3016
雑誌 03787-11



4910037871183
01524

Printed in Japan

心意伝承

—遊働世界に生きる—

ほんじょうまさかず
本莊雅一

第十四回 玉菱鎮石考① 出雲神宝幻視行

「私」の誕生

ぬらぬらした肉塊にくかいがしほり出てくる。

意外と安らいだような、瞑想してゐるような顔をもった肉塊が、どろどろひねりだされる。

その肉塊の皮が、植物の葉っぱのようにめりめり剥はがれて、右手になり、左手となった。大きな糞尿ふんたうりょうのようなそれが、ようやく人の形を顕あらわしてきた。

生まれた。

私が生まれた。いや、私たち夫婦の子どもが生まれたのだが、私の本体がそっちへ行ってしまった。そう実感した。もはや私自身は、かりそめのものでしかない。

そうだ、幼稚園児のころに、なぜ私たちはいずれ死ぬのかと、必死になって考えたことがあって、せめて生ま

まったく同じ「私」が顕あらわれてくる。そういう、まだ何も飾り付けていないむき出しの「私」を、この出産の場で見てしまったとしか、私には思えなかった。

私個人が死んでも、「私」本体は次々に生まれてゆく。今現実私が存在しているのは、生まれては死に、生まれては死にする「私」たちの、二百万年の生命が燃焼し続けているということだ。盛者必衰の道理をくぐりぬけてきた奇跡の現象なのである。

だからなかなか子どもが生まれず、不妊治療や代替出産の方法を模索する人々は、自然に反しているのではない。手段方法が生命伝承の軌道の、あるべき姿に基づくかは問われねばなるまいが、総じて、太古から連綿する自己の生命が、ここで途絶え更新されなくなるといふ恐怖が根底にあるに違いない。自分自身が死ぬことよりも、新しい命が生まれぬ、赤子という「私」の本体の泣き声や笑い声が聞かれないことの方が、どうしようもなく恐ろしい。そうした心意が働くのが、ほんとうに自然なことなのだろう。

北京オリンピック関連で、中国人が「奥運オリムピック」にちなんで、新生児に「奥奥」「京奥」「奥宝」などと名付けをしているという記事があった(二〇〇八年八月一八日付読

れる前のことを思い出せないかと、寝床にはいると暗闇の中で布団をかみしめ泣きながら、誕生以前のこと、生まれた瞬間などを思い出そうとしたことがあった。

過去の記憶を思い出せなかったのではなく、未来の記憶に、約三十年の星霜を踏んで、今やっと追いつき、立ち会っているのだと知った。妻の出産にどうしても立ち会おうとした自分の真意を、そのときはじめて悟った気がする。

妻が妊娠してからの日々も、妊娠する以前の私たち自身の生活も、両親たちそのまた祖父母曾祖父母祖先たちの生活も、すべてこの子自身の生活にすぎなかった。当然それぞれが異なった個体であり、異なった趣味・性格を持ってそれぞれの人生を生きている。それでも、ばらばらのデザインがほどこされた表皮を剥はいでしまえば、

売新聞)。記念のため、開会式の日に合わせて帝王切開で出産させる例も多かつたらしく、それを驚きをもって報道するのが日本のマスメディアの、日本らしいところである。日本の伝承心意の自然観からすると、違和感を覚えるわけだ。

ともかくそうして中国人なりに、記念すべき時に生まれた子どもに「奥運オリムピックの宝」と名付けてゆくが、「宝」は赤ちゃんのことを意味するらしい。うかつなことに、私はこの記事ではじめてそれを知った。

諸橋轅次もろはしじゆうじの『大漢和辞典』で確認しても、確かにそう書いている。「①たから。①金銀珠玉のたぐい。②貨幣。③身体。④子女。こども。⑤貴重なもの」とある。

山上憶良の「銀も金も玉もなにせむにまされる宝子に及かめやも」(万葉集巻第五 八〇三)も当然これを踏まえていたのだろう。「現代にも通じる感性」などと珍しがるのは本末転倒もはなはだしい無知ぶりであったわけだ。子どもをはじめから「私」たちの命であり、人類の宝であった。

神の人形としてのヒトツモノ

第四回で、生命指標としての稚児ちびごということを書いた。

生命指標とは、たとえば和歌の中の枕詞のように、その語自体には特にメッセージ性も、意味もないのだが、しかしその一首全体の調べや、雰囲気を決定的な言葉で、必要不可欠なものである。つまりその一首の生命力を起動させる、表徴アイコトである。

同様に、祭祀祭礼の中で、選ばれた特定の稚児が、そのお祭りの主導権を握っているという場合が多い。ヒトツモノとも言われる。もちろん、その稚児自身がわがままに祭の進行を差配するわけではない。むしろ何もしていない。何か演ずる場合もあるが、基本的には何もしていないで、ただ存在することが、その稚児ヒトツモノのおもな役割と言っ
てよい。

たとえば祇園祭長刀鉾なまこの稚児。テレビで必ず放送される山車の巡行は、この稚児の注連縄ぬめなわ切りによってスタートする。その際、一連の所作があつてから刀で切るの
で、稚児役ちびごやくの少年は事前に練習はするが、本番では大人が背後から手を取り、操り人形のように所作させられ



熊野新宮速玉大社御船神事のヒトツモノ

て、注連縄を切る。これではせっかく練習した意味がないではないかと思われそう。真剣を扱うので危ないから、という理屈で稚児役の子も関係者たちも納得しているのだろう。だがむしろ、稚児は本来人形のような存在なのではなかったか。おもちゃという意味ではない。人間としてのちっぽけな個性を超越した、神性の存在ということだ。稽古するのにも、人形をした神として憑ひきつ霊しやすくするためのものだろう。今日的な意味での「物」扱いは違う。モノ・たましいとしての扱ひである。

熊野新宮速玉大社御船神事のヒトツモノにいたっては、本場に作り物の稚児人形である。この、馬にのるヒトツモノが、神霊を遷した神輿みこしを先導して町内を巡行する。このように、ヒトツモノは神霊の活動や祭礼の発動に不可欠な、電流スイッチのような役割を果たす。それはどこまでも無機物に近いような存在でありながら、その場を激しく遊働させる電池のごとくである。

「私」たちの宝意識を考える

言わずもがなのことだが、子どもはひとつの家庭の中の宝であるばかりではなく、人間社会全体の宝であ

る。にもかかわらず、現代社会における子宝観には、どうしてもいびつさを感じざるを得ない。

過剰にわが子のみを愛玩する親。過剰にわが子を虐待する親。対極のようであり、根はひとつである。

わが子の生命を自分個人の所有物として扱っているにすぎないからだ。

わが子を商品として収入源に仕立てるか、鬱憤晴らしのサンドバッグとして消費するかの違いはあつても、両者とも、子どもを自分の意志で自由に操作できる（べき）品物とみなしている。宝として奉仕する心持とはまったく異質なものである。

しかし私は、日本人が古来より持っていた自然観・生命観が根こそぎ消滅したのではなく、表面上変化の激しい社会の中で、グローバル化の進む世界の中で、「異質なニッポン」とみなされることを恐れるあまり、私たちの精神の髄脈に息づくものを封印してしまっているのではないかと思っている。

神様仏様世間様ご先祖様……といったものを大事にする湿潤な共感社会ウツクシキのありようを、我が国の都市部では懸命に駆逐しようとしてきた。徹底した利益社会リベニヤクトの追求と情実の排除が、小さな仲間うちでのいじめや家庭内での

家族崩壊に直結する、感情の破裂（いわゆる「切れる」状態）をおびただしく生み出した。

そうしたことから、子どもをはじめとして、食べ物や飲み物、生活を支える様々なもの、身のまわりの自然、などといったたくさんのお宝への感覚もマヒしてしまっている。栄養があるとかないとか、土地や海の生産力やエコロジカルな効用とか、いわゆる「ためになる」かどうかを私たちは尺度にしてしまいがちだが、それ以前に、何かの効用があるかどうか以前に、そうしたモノたちの命の輝きを知り、味わうことが、本当に物を大事にすることなのではなかったか。

日本人にとつての宝、それに関する意識について、考えてみるべきだと思う。「私」たちの中に息づいているはずの宝感覚が、「私」たちの道徳の典拠でもあるのではないかと思う。

また古臭い事例に注目することになるが、今日これからの世界だからこそ、表面的な趨勢に対応しつつも、「私」たちの身魂に深く脈打つものを、毅然として顕すべきではないか。

そこで、古来からの「私」たちにとつて……と、問題設定を試みたい。

「出雲神宝事件」の構成

宝をめぐる諸問題の凝縮した事例として、崇神紀六十年条に注目したい。「出雲神宝事件」として学界をにぎわせているものである。

この話は、四つの場面構成からなっている。

(1) 出雲臣の祖神に当たる武日照命が天から持ってきた神宝が、出雲大神の宮に収められているのでそれを見たいと、崇神天皇が言い出した。そこで物部氏に当たる武諸隅を出雲へ派遣した。ところが神宝を管理している出雲臣の遠祖、出雲振根は筑紫国へ行って留守であった。そこで弟の飯入根が、神宝を弟の甘美韓日狭と子の鵜濡淳に託して大和朝廷へ献上した。筑紫から帰ってきた振根は怒った。「なにをびびってんだ。かんたんにお宝を渡しちまうて！」と怒鳴った。

(2) 年月がたつても、振根の怒りはやまない。やはり弟を殺そうと思つて、言った。「最近、止屋の淵に菱がたくさん生えている。できればお前と一緒に行って、見たいものだ」と。弟は素直に兄に従つてついで

古来からの「私」たちにとってどんなものが宝か（宝物は何か）、と問うことは、少なくとも主たる目的とはしない。

考古学、歴史学者たちの膨大な研究成果のすべてを読みとおしたわけではないが、それでも大変魅力的な推理や学説にあふれているのはわかる。だが私は、歴史的事実の謎解きを目標にするのではなく、心的な事実を探つてゆきたい。

古来からの「私」たちにとつて宝なるものに、いったい何を感じているのか（どのように感じるから、それが宝たりうるのか）。

宝を奉ずる行為は、どのような意識・感性に支えられているのか。

いわゆるまとめをするというよりは、本章ではどんな問題点を拡散させていってみたいと思う。私個人が何を言おうとも、本当の答えは、あなた方の心にある。それを探り、とらえてみる手がかりをいくつかでも示せば、と思う。

ていった。兄はあらかじめ、真刀に似せた木刀を作っておき、それを佩いていった。弟は真刀を佩いている。淵のほとりに来て、兄は弟に言った。「なんと清冷い水ではないか。一緒に游泳しよう」と。

兄弟は刀を水辺において、淵に入って沐浴した。兄が先に上がつて、弟の真刀を横取りして佩いた。弟は驚いて兄の木刀をとった。互いに打ち合ったが、弟は木刀なので抜くことができず、兄は弟の飯入根を打ち殺した。時の人が歌に詠んだ。「や雲立つ出雲臯帥が 佩ける太刀 黒葛多巻き さ身無しにあはれ（出雲建の佩いていた太刀は、葛をたくさん巻いてはあったが、中身がなくて気の毒であった）

―岩波古典文学大系本による訳―

(3) 甘美韓日狭と鵜濡淳は大和朝廷に訴え出た。そこで朝廷は吉備津彦と武渟河別二人の将軍を派遣して、出雲振根を斃した。出雲臣らは恐れおののいて、大神の祭祀を行なわなくなった。

(4) あるとき、丹波の氷上に住む氷香戸邊というものがある、皇太子活目尊に奏上した。「私の子に小児がおります。自然と、このようなことを申しました。」

玉菱鏡石。出雲人の祭る、真種の甘美鏡。押し羽振る、甘美御神、底寶御寶主。
山河の水泳る御魂。静掛かる甘美御神、底寶御寶主。

(玉のような水草の中に沈んでいる石。出雲の人の祈り祭る、本物の見事な鏡。力強く活力を振う立派な御神の鏡、水底の宝、宝の主。山河の水の洗う御魂。沈んで掛かっている立派な御神の鏡、水底の宝、宝の主。―岩波古典文学大系本による訳―)

これは小児の言葉とも思えません。あるいは何かがり憑いて言わせたのではないでしょうか

皇太子は、天皇に報告した。そこで勅命により祭祀をさせることになった。

この話は『古事記』にも『出雲国風土記』にもなく、『古語拾遺』や『先代旧事本紀』にもない。『日本書紀』でのみ展開するストーリーである。言わずもがなではないが、出雲側の言い分は反映されず、大和朝廷側編纂者の意図が多分に反映したものと考えるべきである。

なのか、それ自体が分かっていないことになる。

神宝を飯入根が勝手に大和朝廷に献上して、振根が怒ったとあるが、そもそも何を献上したのか書いていない。これは異例なことだ。記紀風土記その他の神話全般を通して、話の展開のカギになる呪物・宝物は、必ず具体的に記述されている。イザナギ・イザナミ二神が国土を修理固成する際のアメノヌボコ、ヤマタノオロチのしっぽから出てきた十拳劍(草薙劍)、山幸彦や神功皇后が海神から与えられる干珠・満珠、神武天皇に与えられる神劍御霊 などなど、ことさら秘め隠すことはない。この、出雲神宝だけが例外的に具体物を伏せて記述されているのである。

第(4)段の小児の託宣をそのまま出雲神宝そのものに適用して、玉(水泳御魂)と鏡であるとする研究者が多いが、それは短絡的すぎる。水香戸邊は奇瑞の報告をしているのであって、出雲神宝の調査結果報告をしているのではない。ここでの託宣を、本当に「出雲の神様」が小児に取り付いて「出雲神宝の真実」を告げた、と信仰するのは個人の勝手だが、研究者までが同じような「信仰」に基づいて論を起こしてはなるまい。

あるいは託宣物語に仮託して、編纂者が出雲神宝の内

「出雲神宝」の正体は不明のままである

ところで第(2)段については、『古事記』に類話がある。ヤマトタケルが出雲に入って、出雲建を殺す話で、まず出雲建と友達になり、その後は崇神紀六十年条の第(2)段の展開とほぼ同じ。肥河で一緒に沐浴し、ヤマトタケルが、用意していた木刀を出雲建の真刀と交換して、出雲建を打ち殺す。「やつめさす 出雲建が 佩ける刀 黒葛多巻き さ身無しにあはれ」とヤマトタケル自身が詠む話になっている。

『古事記』の方が成立年代が早い(七二二年成立)『日本書紀』は七二〇年)とはいえ、編纂事業自体はほぼ同時代に行なわれていたのだから、『古事記』の方がオリジナルで『日本書紀』がバクリである、とも限らないだろう。おなじモチーフの民話が、それぞれに設定を変えて編入されているとみておいてよい。

したがって、「出雲神宝事件」の四つの場面は、矛盾せずつながっているように見えるが、じつはそう編集されているからであって、元来はまったく別々の民話伝説を組み合わせているにすぎない。そうするとつまり、この事件で大問題になっている出雲の神宝とはそもそも何容を読者に示していると読むこともできようが、じつに巧妙で、書紀編纂者の責任はまぬかれるような回りくどい表示の仕方ではないか。まるでこの託宣の記事に引っかけられて、読者が「出雲神宝は玉と鏡」と解釈してしまいうように仕向けているようだ。「そう解釈するのはそちらの勝手だ。われわれは玉だの鏡だのが出雲神宝であるとは、一言も書いていないよ」という声さえ聞こえてくる。

確かに『延喜式』神祇二 臨時祭式の条で、出雲国造が朝廷に「神賀詞」を奏上する際に献上する神宝として、「玉(赤水精・白水精・青石玉)、横刀、鏡、倭文布、白馬、白鶴」が列挙されているから、それを根拠として崇神紀の出雲神宝を推理したとも言えよう。しかしこの場合はもはや律令体制が完成して、天皇の繁栄をことほぐ目的の「神賀詞」と、天皇への祝意を込めた「神宝」の献上であるわけだから、もともと出雲人が、大和朝廷の天皇のためではなく独自に行なっていた祭祀の神宝と、イコールであるという証拠にはならない。

要するに、出雲神宝の正体は、じつのところは分かっているのだから。振根を殺したあと、まるでその崇りのように小児の託宣が布置されて、あわてて出雲

神宝を返還したかのような印象を受けるストーリーになっている。本当は、そもそも出雲神宝の収奪に失敗したか、ガセネタをつかまされたかの失態を、うまくごまかしたようにしか見えない。

その証拠のように、崇神天皇の崩御後に即位した垂仁天皇（活目尊）は、その二六年条でしびれを切らせ、物部十千根大連にこう述べたとある。

「これまで何度も使者を出雲に派遣して神宝を検校させているが、いまだにはつきりしない。お前が出雲へ行って、見極めてこい」と。

そして十千根大連が検校の結果、出雲の神宝を明確化し、管掌するようになった、という。

それにしても検校結果の具体的内容は記述していない。わかったと言うからには、わかったのだろうが、おそらく大和朝廷中心の「正史」には記述できないようなものだったのだろう。こうして『日本書紀』ではすでに解決済み扱いされてしまっている分、謎は深まるばかりである。

小児の託宣のコンステレーション

「出雲神宝事件」物語はいったん保留にして、注目すべきは、水上ではないかと思う。

水香戸邊の小児の、「玉菱鎮石」詞章は、それ自体が音韻的にも印象的で（読み方自体にも諸説あるのだが、どの読み方にしても大差のないインパクトがある）、本居宣長（『玉勝間』）、伴信友（『比古婆衣』）以来、大勢の研究者たちがさまざまな解釈を試みている（注）。

だがどれにも共通して言えるのは、「出雲神宝事件」の流れをそのまま素朴に受けとめて、この託宣も「日の当たらないところに追いやられた出雲の神宝を、改めて祭祀しなおせ」と命ずるものにとらえているのである。水上それ自体の意義については、何ら問うことをしていない。

託宣そのものについてもう一度見てみよう。

玉菱鎮石。出雲人の祭る、真種の甘美鏡。押し羽振る、甘美御神、底寶御寶主。
山河の水泳る御魂。静掛かる甘美御神、底寶御寶主。

た宝の処遇を改善をすべき、といったトーンで解釈するが、原文を素直に読む限り、そのような暗く、かこ顔な印象はない。さらに言うとな属製の鏡や鋳物加工の玉のことですら、ない。水草や石ころの類、どこにでもあるようなものが水に洗われているさまに、ほんとうの「玉」や「鏡」を見出すというのである。だからむしろ、水底にあることの方が、威厳を生んでさえない。積極的に水との関係で感じ取るべき宝なのだ。

水泳御魂の正体

数年前のことだが、奈良県のお祭りを観る予定で現地へ向かう途中、たまたま大阪府富田林市に、延喜式内社「美具久留御魂神社」があるのを見つけた。驚いて、祭の時間に間に合うか気にしながらも、美具久留御魂神社へと向かった。

本殿に参拝し、念のためコンパスで方位を確認してみると、社殿は東向きになっていた。ふつうは南向きのはずだが、何か意味があるのかと振り返って見ると、鳥居の向こうのまさに正面に、二上山がそびえている。

おお、なるほど！ これだと春分と秋分の日には、雄

語義解釈については誰もが難解だという。確かに、神からの命令を前提とした意味説明のために、だが、だれに、何を、どうせよと命じているのか、明確にしようとする、難しいかもしれない。しかし、先にも指摘したとおり、「出雲神宝事件」物語は、もとはばらばらの民話を、なるべくつじつまの合うように、状況設定などいじりながら編集したものと考えられるから、この託宣も、「出雲振根と飯入根とが抗争し崇神朝が介入する神宝事件」とは切り離して、単純に「出雲神宝の在り方イメージ」として読んでみてはどうだろうか。

下手に語義解釈するのではなく、使われている言葉はそのままに、それぞれの連関性を味わってみよう。

きらめく川藻に霊気みなぎる石。それらはイコール、出雲の人々が祭る本当の鏡。

それはイコール、羽ばたくような威力を感じる神そのもの。すなわち底寶にして御寶主。

山河の流れに洗われる御魂。しんと静まった麗しい神。すなわち底寶にして御寶主。

ほとんどの研究者は、水底に沈められた玉や鏡は、本来の扱いをされていない不遇の宝であり、何とかこうし